

アテネ・オリンピック 2004 の文化的側面

真田 久・宮下 憲・嵯峨 寿

Cultural aspects of Athens Olympic Games 2004

SANADA Hisashi, MIYASHITA Ken, SAGA Hitoshi

はじめに

アテネ・オリンピック 2004 は「オリンピックの里帰り」といわれた。古代オリンピックと近代オリンピック発祥の地、ギリシャでの開催ということから、オリンピックの原点を見つめ直そうとする試みが期待されたからである。オリンピックの原点とは、オリンピック憲章に盛り込まれたオリンピック理念から考えれば、「スポーツを通して人間を育成し、競技会の開催を通して地域間、民族間の文化交流、文化理解が推進される」ことであろう。古代ではオリンピック休戦を行ったし、オリンピック憲章では平和な社会の建設への貢献をうたい上げている。

しかし、オリンピックの規模は、1896年の頃と明らかに変化している。日数、種目数、参加地域、選手数の変化を追うと、1896年の大会と今回の大会では、日数で1.7倍、種目数で7倍、参加地域で4.7倍、そして参加選手数は何と45倍になっている(表1参照)。

明らかに近代オリンピックは、108年の間に規模が拡大し続けたことがわかる。202カ国・地域の参加は、国連加盟国数(2005年2月現在191)より多く、イラクとアフガニスタンが参加するなど、IOCに加盟するすべての国・地域が大会に参加した。

表1 第1回大会と第28回大会の規模の比較

	第1回オリンピック (1896年アテネ)	第28回オリンピック (2004年アテネ)
日数	10日間	17日間
開催年	1896年	2004年
競技種目数	9競技 43種目	28競技 301種目
参加地域	14カ国	202カ国・地域
主競技場の観客数	5万人	7.7万人
参加選手数	241人	約10,500人
女性選手数	参加者なし	約4,000人
優勝者への賞	銀メダルと月桂冠	金メダルとオリーブの葉冠
理念	古代の復興、平和と友好	平和と友好の祭典 スポーツマンシップ
アスリートの規則	アマチュアリズム	ドーピングの禁止

このようにオリンピックが肥大化する一方、2004年のアテネ大会を振り返ると、テロ対策としての警備費の高騰やドーピング違反者の増加など、多くの問題を投げかけた大会でもあった。

しかしその一方で、アテネ大会組織委員会は、オリンピックの原点を振り返るべく、いくつかの

工夫を施していたことも事実である。オリンピックはスポーツの競技面ばかりではなく、文化性、芸術性、歴史性などの側面を有した文化複合であるが、これらの面については、マスコミではほとんど取り上げられなかった。本論ではアテネ・オリンピックの文化的側面に着目し、その視点でア

テネ大会の特徴を振り返りたい。

1. 聖火リレー

1-1. 五大大陸を回った聖火リレー

原点回帰をめざした試みの一つに、五大大陸（34都市）を回った聖火リレーがまずあげられる。オリンピックは、五大大陸すべてにわたる運動とされているが、アフリカと南アメリカでは未だオリンピック競技会は開催されていない。今回はこのような大陸の都市（カイロ、ケープタウン、リオデジャネイロ）にも聖火リレーを継走させて、オリンピックの理念がグローバルに展開されるように試みたといえる。ケープタウンでは、ネルソン・マンデラ前大統領が聖火リレーに参加し、リオデジャネイロでは、サッカーの神様といわれたペレや、ジーコ日本代表監督も聖火ランナーの一人として参加した。また、過去の夏季大会の開催地すべてをつないで聖火リレーが行われ、いずれもオリンピック史上初の試みとなった。聖火リレーは、オリンピック・ムーブメントの象徴であり、その意味で延べにして8万Kmを走って五大大陸すべてを回ったことは、画期的な行事であった。

東京でも、シドニー、メルボルンから受け継いで、6月6日の日曜日に聖火リレーが行われ、オリンピック選手や芸能人、それに一般公募で選ばれた人々など136人が50Kmをリレーした。オリンピック夏季大会では東京オリンピック以来、40年ぶりであったが、聖火リレーの本来の意味を人々に伝え、理解させる手だてが希薄だったのが残念であった。40年前と比べると、聖火ランナーよりは、聖火リレーのスポンサー企業の旗や関係者が多く、スポンサーによる聖火リレーの実演という面が目立ってしまったように思われる。



写真 1：聖火リレーの国際ルート（日本オリンピック・アカデミー編、21世紀オリンピック豆事典 株式会社楽 2004.p.18）

1-2. 聖火と聖火リレーの原点

古代ギリシャでは、聖火や聖火リレーはどのような意味があったのであろうか。

ギリシャ神話において火にまつわる神々は、鍛冶の神であるヘーパイストス、人間に火を渡したプロメテウス、そして炉・かまどを住居とする女神ヘスティアである。古代では、火を焚く場所である炉はヘスティアと呼ばれた。神話によれば、ヘスティアはクロノスとレアの長女で、すべての人間の家、神々の神殿において祭られることを約束された女神であった。古代の家の炉は家の中心であるため、この女神は家庭生活の女神として崇められた。市庁舎ブリュタネイオンにも市の炉があり、ヘスティアはその保護者として、また安寧と繁栄の神として崇められた。ある市がギリシャ以外の地に植民市を建設する場合にも、市の炉の火をそのまま運び、その聖なる火が新しい市の炉に灯されたのであった。聖なる炉の火により、母市と植民市が結ばれることになる。その意味で元の炉の火をそのまま移送することが重要であった。

アテネでは多くの祭典でトーチレース（たいまつ競走）が行われていた。パンアテナイア祭、プロメテウス祭、ヘーパイストス祭、パン祭、ベンディス祭、さらに死者祭祀としても行われた。最初の3つのトーチレースはアカデメイアのプロメテウスの祭壇から別の祭壇（パンアテナイア祭ではパルテノン神殿）までを走った。

レースの形式は個人戦と集団戦との二つに分けられる。前者は火のついたトーチをもった多くの走者が、一斉にスタートし、火を灯したまま最初にゴールした者が勝者になる¹⁾。集団で行われる方法は、火をつけたトーチを次々にリレー形式で手渡していき、最終走者が先にゴールしたグループが優勝する²⁾。パンアテナイア祭では2.5Kmの距離を10の部族が争ったと記されている。1チーム40人であるから、60mでトーチが次々に渡されていったことになる。アクロポリスの丘の上に建つパルテノン神殿がゴールであるから、火のついたトーチが、夜空に次々と全速力でアクロポリスに上って行く様は、さぞかし壮観であったことと思われる。

リレー形式のトーチレースはベルシャの伝令システムにならったものとヘロドトスは記している。ベンディス（アルテミス女神のトラキア語）祭のトーチレースは夜、ピレウスで行われ、馬に乗っ

でのリレー形式で競走した³⁾。

トーチレースの起源は、灯されている祭壇の聖なる火を古い祭壇の炉に移送する習慣にあると考えられる。祭壇にある古く穢れた火は、新しく清浄な火を受けるためにしばしば消された。新しい火の到来を待つ祭壇に、できるだけ早く運ぶ事は清浄さを保つのに重要で、一人の走者が全速力で走るか、距離が長ければ、手渡しでのリレーが行われた。聖なる火は、日常的な使用のほか、死者や敵の出現などにより穢れると広く考えられていて、それゆえ定期的、あるいは不定期に火を消して清浄な火を新たに灯さなければならなかった。例えば、プラタイアの戦い（前 479 年）の後、ペルシャ人の出現により、町のすべての火が穢されてしまったと考え、新しく聖なる火がデルフォイの祭壇から全速力で走って運ばれた⁴⁾。またレムノス島では、島全体がヘーパイストスの信仰を持っているが、島を浄化する儀礼が毎年行われ、島のすべての火が 9 日間消され、その後デロス島の聖なる火を運んで再び点火されたという⁵⁾。

トーチレースの勝者は、祭壇で神への犠牲を捧げるための火を、そのトーチでつける役割を果たしていることが、複数の壺絵からうかがわれる。したがってトーチレースは、古くなった祭壇の炉の火を定期的に浄化する機能も持ち合わせていたものと考えられる。

古代のトーチレースの意義からすると、今日の聖火リレーは、古代オリンピックから引き継がれている理念（聖なる休戦や心身の調和的な発達、文化的な発展）をそのままにその都市に広め、そ



写真 2：古代の聖火リレー、(たいまつ競走) (N.Yalouris, The Eternal Olympics. New York. 1979. p. 248.)

の都市を浄化し、活性化していくということになるであろう。この聖火リレーの意味を再確認するような手だが、アテネ・オリンピックの五大陸を回る聖火リレーに関係づけて、行われるべきではなかったかと思われる。

2. 遺跡と歴史的競技場での競技

古代オリンピック発祥の地、オリンピアの競技場で男女の砲丸投げ競技が行われたことは特筆すべきことである。オリンピアの聖地で近代オリンピックの種目が行われたのは初めてであり、まして古代において女性の参加は認められていなかったため、女性アスリートの聖地への参加という視点からも画期的なできごとであった（ただし、古代ではオリンピアで女性たちだけの競技祭が別の日に行われていた）。

パルテノン神殿の東方向に位置するパナシナイコ競技場は、オリンピックの復興を記念する競技場である。1896 年の第 1 回大会のメイン会場となり、マラソン競技ではギリシャ人の S.ルイスが、先頭で競技場に戻り、場内外で 10 万人にまであふれたギリシャ人を熱狂させた。大会組織委員長のギリシャ皇太子も感激のあまり、場内をルイスと一緒に伴走した。近代オリンピックの祖、クーベルタンもこの光景を見て、第 1 回大会は成功したと言わしめたのであった。

今回の第 28 回アテネ大会において、パナシナイコ競技場は、アーチェリー、およびマラソンのゴールとして使われた。この競技場は細長い馬蹄形をしていて、1896 年の第 1 回大会ではカーブがきつく、コーナーワークがさぞ大変であったろうと思われる。馬蹄形なのはこの競技場が、古代にも使われていたことを示している。古代の競技場は、競走路（スタディオン）を一直線に走り、長い距離の場合も競走路を往復する形式で行われたので、周回するトラックはなかったが、ローマ期に円形劇場が競走路に備え付けられたのである。

古代アテネでは毎夏都市の守護神であるアテナ女神の誕生を祝うパンアテナイアと呼ばれる祭典を行っていたが、紀元前 6 世紀の半ばから 4 年に 1 度、スポーツ競技も取り入れた大規模な大パンアテナイア祭が行なわれるようになった。前 4 世紀に政治家リュクルゴスによってスポーツ競技の会場としてこの競技場が建造された。そこでは戦車競走、競馬、レスリング、ボクシング、槍投

げ、円盤投げ、ランニング、跳躍、その他にトーチリレーや行列、詩の吟唱なども行なわれ、競技の優勝者にはオリーブ油の入った大瓶(おがめ)が与えられた。アテネの繁栄とともに、パンアテナ祭も発展し、オリンピアやデルフォイなどの全ギリシャ的祭典と肩を並べる程の大祭典になった。2世紀にヘロデスという富豪の寄進により、5万人分の観客席が白い大理石で作られ、美しさを増した。

この競技場が近代に姿を表したのは、ドイツの建築家ツィラーの発掘(1869-70年)によってだが、大理石の観客席の復原はできなかった。それでも1870年と1875年に、ギリシャ独自のオリンピックをこのパナシナイコ競技場で開催した。1896年の記念すべき第1回近代オリンピック開催の際には、アレクサンドリアに住むアペロフが競技場の整備に巨額の資金を寄付した。しかし修復は間に合わず、前列数列目までが大理石、残りは木の席でオリンピックが行なわれた。全てが大理石に戻ったのは1906年の中間オリンピックの時であった。

アテネの人々に「カリマルマロ」(良質の大理石)の愛称で親しまれているパナシナイコ競技場は、古代と近代のみならず、21世紀のオリンピック競技会の舞台にもなったことから、「全時代通じてのオリンピック・スタジアム」といい得であろう。



写真3：オリンピア競技場のスタートライン
(著者撮影)



写真4：パナシナイコ競技場(著者撮影)

3. オリーブの葉冠と金メダルのデザイン

3-1. オリーブの葉冠

2004年のアテネ・オリンピックにおいて、古代オリンピックで優勝した選手と同様にオリーブの葉冠も授与された。古代では、ピュティア祭やイストミア祭など、他の四大競技祭でも、月桂樹やセロリなど、野生の葉冠が優勝者に授与された。そのためこうした競技会は、神聖競技会ともよばれていた。それと区別する意味で、賞金や高価な品物を授与する競技会は賞金競技会と古代ではよばれていた。

古代オリンピックでは、なぜオリーブの葉冠が勝者に与えられたのであろうか。オリーブの葉冠については、ヘラクレスがヒュベルボレイオス人の国からオリーブの木を持って来たとの伝説が伝えられている⁶⁾。ヒュベルボレイオス人の国は、極北にある理想郷と考えられていた地で、その人々は何不自由なく幸福に暮らし、空中を飛行し、地中の財宝を発見する力を有していたと信じられていた。ヘラクレスが、その地からまだ樹木が生えていなかったオリンピアに、オリーブの苗木を持って来たということを前5世紀の詩人、ピンダロスが伝えている⁷⁾。そして、オリンピアにあるゼウス神殿後方の部屋の向かい側に、神聖なオリーブの木があり、そこから競技の勝者の葉冠が作られたのであった⁸⁾。

葉冠が優勝者の賞として授与されたのは、オリンピアの祭典だけではなく、デルフォイやネメア、イストモスで行われた祭典でも同様であった。デルフォイで行われたピュティア競技祭では、月桂樹が優勝者に授与された。月桂樹を授与する由来は、アポロンが愛した最初の少女ダブネー(月桂樹の意)に由来する。彼女はアポロンから身を隠

すために母なる大地に一本の月桂樹に姿を変えてもらう。それ以後月桂樹はアポロンのお気に入りの木になり、その小枝を冠としてつけるようになったといわれる⁹⁾。

神が枝を持ってくるという行為は、富を運び込むということ象徴している。古代ギリシャの町では、羊毛、さまざまな種類の果実、菓子、油つぼなどをオリーブの小枝につり下げ、子ども達が一定の日にこれをついで家々を回り、歌いながら、プレゼントを集めて回る習慣があった¹⁰⁾。この豊かなオリーブの小枝はエイレシオネと呼ばれ、家々の戸口に最終的に飾られた。これは富や豊穡を呼び込むという意味があった。

また、月桂樹の枝を運ぶ祭、ダブネボリアも富を運び込む意味を有していた。オリーブの木の幹に月桂樹の小枝、光沢を放つ金属製の葉、紫色に染められた羊毛などが飾り付けられ、それをアポロンが持ってくるのであり、神の来迎を意味するものでもあった。祭りを通して神を呼び寄せ、それと同時に富を運び込むことにつながるのである。

このようなことから、オリーブの小枝で作られた葉冠をオリンピックの優勝者に授与することは、神に護られた者の証であり、富、豊穡がその者の周りに集まることを意味していた。オリーブの葉冠には、本来そのような意味が込められていたのである。



写真5：オリーブの葉冠（著者撮影）



写真6：月桂樹の葉冠（著者撮影）

3-2. 金メダルのデザインの改訂

2004年のアテネ・オリンピックから金メダルのデザインが改訂された。1928年のアムステルダム大会よりメダルの表のデザインは一定で、座っている勝利の女神ニケが月桂冠としゅるの枝を持っていて、背景にはローマのコロッセウムが描かれていた。アテネ・オリンピックのメダルには、ニケがアスリートの上に舞い降りようとしている所が描かれている。背景もコロッセウムから、パナシナイコ競技場に代わっている。このニケ像はオリンピア出土のパイオニオス作のニケ像をモチーフにしたものである。この像は、ゼウスの神殿の入り口付近に立てられていたもので、現在はオリンピア博物館に展示されている。つまり、オリンピアゆかりのニケ像をデザインしたということになる。またメダルの裏面は、聖火と紀元前5世紀に勝利者の賛歌をうたいあげたピンダロスの詩の一文が付されている。

「黄金の冠を授ける競技の母オリンピアよ、真の女王よ！」¹¹⁾

このメダルのデザインは、古代オリンピックと第1回近代オリンピックを意識したものであり、オリンピックの歴史的原点に立ち返ろうとした組織委員会の工夫といえるだろう。メダルに新たに刻まれたオリンピアのニケが、アテネ・オリンピックにおける日本選手の活躍に微笑んでくれたといえ、原点回帰の女神は日本人にとってはありがたい女神となった。



写真7：オリンピアのニケ像（著者撮影）

写真8：金メダルのデザイン（表・裏）
（IOCのホームページより）

4．カルチュラル・オリンピアドとオリンピック教育

4-1．カルチュラル・オリンピアド

2004年7月上旬、ユーロサッカー2004でギリシャ中が沸き立っていた時期に、アテネ市内にあるヘロドアッティコス野外音楽堂では、日本の蜷川幸雄演出によるギリシャ悲劇『オイディプス王』が上演され、好評を博した。このイベントは、アテネ・オリンピックの文化的行事、カルチュラル・オリンピアドの一つとして行われたものである。

オリンピックはスポーツの祭典という面ばかりではなく、他の文化や芸術とも密接に結びついている。オリンピック憲章には、各大会の組織委員会が、オリンピック競技会の開催にあわせて、文化プログラムを行うことが規定されている。

このプログラムは、1912年以來、最初は芸術競技として、次に芸術展示、そして第25回バルセロナ大会(1992年)から文化プログラムへと歴史的に変化しながらも継続されてきた。これは古代オリンピックが、スポーツの祭典でありながらも、同時に絵画や詩歌、弁論などの多様な文化を発展させてきた事実に基づいて始められたものである。

オリンピック競技会から次の大会までの4年間（正確には年末まで）はオリンピアドといわれるが、この期間に行われる文化プログラムがカルチュラル・オリンピアドと銘打たれ、ギリシャ文化省とオリンピック組織委員会により、多彩なプログラムが実施された。このプログラムでは2001年から2004年の間、国際会議、演劇、音楽、ダンス、展覧会など、さまざまな文化と芸術のイベントが行われた。これは文化の創造性を競い合う国際的な機関として、平和、フェアプレー、創造性、人間の普遍性という理想を守り、そのメッセージを世界中に伝えようと意図されたものであった。

2004年のアテネ・オリンピックのカルチュラル・オリンピアドは、蜷川による古代劇の上演のほか、展覧会部門では各地の博物館で次のイベントが開催された。

・「古代ギリシャの競技精神」(6～9月アテネ国立考古学博物館)

古代オリンピック競技会に関連したギリシャの古代美術品(壺やフレスコ画などを中心に)を展示。海外の美術館からの出品もなされた。

・「オリンピック競技会の歴史」(歴史博物館)

近代オリンピックの歴史について、ギリシャの史料を中心にまとめて展示されていた。なかでも19世紀に行われたギリシャ独自のオリンピック競技会の展開に力を入れて展示された。また第1回のアテネ大会、そして1906年に近代オリンピック復興10周年を記念して開催されたアテネ国際競技大会(後に中間オリンピックといわれる)の内容に関する豊富な写真や資料を用いて展示されていた。パナシナイコ競技場において実施された競技種目の中では、障害走のハードルの形が変化

して行く様を観察することができた。

・「プリーツ：古代のギリシャから 21 世紀まで」
(6~10 月アテネ、ベナキ博物館カルチュラルセンター)

服飾の歴史に古代から登場する「プリーツ」に関する展示。21 世紀のファッションへの影響についても考察されていた。

・「ヨーロッパ彫刻 6 人展」(6~10 月アテネ・ナショナルギャラリー)

19~20 世紀にかけて活躍した彫刻家で、古典彫刻と現代彫刻の橋渡し役を務めた 6 人の彫刻家、ロダン、プルーデル、マイヨール、ブランクーシ、ジャコメッティ、ムーアの作品展。

・「アボリジニ展」(7 月~8 月アテネ、ベナキ博物館)

オーストラリア先住民であるアボリジニの歴史や、文化、伝統、習俗、生活に関する展示。2000 年のシドニー・オリンピックの文化プログラムにおいて開催されたギリシャ展に対する返礼展として行われた。

そのほかにも、「カザンザキス展」(3 月~8 月)がクレタ島各地で行われた。カザンザキスは、小

説「その男ゾルバ」で知られるクレタ島生まれの作家で、彼の原稿や写真などの展示と、作品の舞台上演、音楽イベントが行われた。

このほか古代オリンピアでのオペラの上演、アテネでの世界的に活躍する舞踊団の公演、古代エピダウロス劇場での古代劇の上演などがある。サッカーの予選会場となったボロス、ヘラクリオ、テッサロニキ、パトラスの各市でも、地方色豊かな文化的行事が行われた。

これらの催しを通して、古代と近代のオリンピックの歴史とともに、ギリシャ文化が人間性の発展に寄与することを再確認しようとしたものと組織委員会は説明している。

また、大会の競技場や付属施設などの建築やポスター、入場券のデザイン一つとっても、そこには芸術性があり、オリンピックと芸術・文化はお互いにかかわり合いながら進歩している。文化プログラムは、オリンピック・ムーブメントにとって重要な役割を担っているといえ、その視点からオリンピック・ムーブメントを探求していくことも必要であろう。



写真 9：エピダウロス劇場（著者撮影）



写真 10：エピダウロスの競技場（著者撮影）



写真 11：歴史博物館（著者撮影）

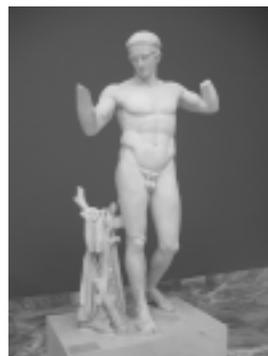


写真 12：古代の競技者像（著者撮影）

4-2. アテネ・オリンピックの教育プログラム

オリンピック競技大会の開催地では、各学校でオリンピック教育が行われることが一般的になっている。アテネ大会でも、オリンピックを学ぶテキスト（8冊の本とビデオテープ1本）が作成された。その中には、次のことが書かれている。

6～9歳用のテキストでは、近代オリンピックの祖、クーベルタンが古代オリンピックの神話について説明することから始めている。生徒は、オリンピックの聖火、旗などを描いたり、クイズに答えながら、オリンピックの理念やスポーツのルールなどを学習するようになっている。

10～12歳用では、古代オリンピックがどのように行われたのか、などについて古代のつぼに描かれた絵画などから学んだり、近代オリンピックが1896年にアテネで復興された経緯や、オリンピックのモットー、理念などについて学ぶようになっている。また、パラリンピック競技大会についての説明もなされている。

13～16歳用のテキストでは、古代オリンピックと近代オリンピックの歴史と理念などのほか、オリンピックが平和、友好、協同の考えとともに、ボランティア精神による参加の大切さ、環境を守ることの大切さ、などについても学ぶようになっ

ている。これらは、写真やイラストを多く使いながら、クイズ、質問や学習作業を通して、おもしろく学べるように工夫されている。さらに、ビデオテープでは、アテネ・オリンピックで実際に行われる競技種目の紹介が、音楽とともに紹介されている。

また、アテネに設立された国際休戦センターでは、オリンピック休戦のテキストが発行された。このテキストは漫画が盛り込まれており、7カ国語に翻訳された（残念ながら日本語訳はない）。

今回のオリンピックでは、日本選手のメダル獲得数が増えた一方で、期待されていた選手やチームがメダルに達しないなど、悲喜こもごものドラマが展開された。勝敗に関係なく、選手たちの努力の足跡に対して顕彰していくことも必要ではないだろうか。彼らの生き方には青少年に伝えるべきものがあるはずであり、それを抽出し、オリンピックの理念とともに伝えていくことが本来のオリンピック・ムーブメントの一つといえよう。日本選手が活躍した時にこそ、教育的な視点から、オリンピック・ムーブメントの振興をはかることが、スポーツをより高い文化に高めるために重要であろう。

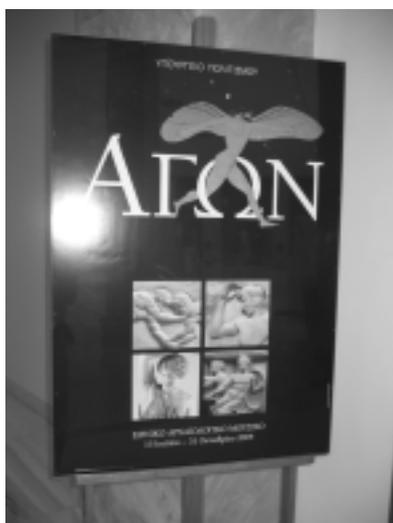


写真 13: 考古学博物館での文化プログラム・ポスター
(著者撮影)



写真 14: オリンピック休戦について刻まれたイフィトスの円盤（復原著者撮影）

5. ネメア復興競技祭

5-1. 古代四大競技祭

古代ギリシャでは、オリンピアの祭典（古代オリンピック）は全ギリシャ的な祭典として有名であるが、デルフィ、ネメア、イストモスでの競技祭も全ギリシャ的な祭典と位置づけられていた。したがって、それら四大競技祭すべてで優勝したアスリートは巡回優勝者（Periodonikes）と呼ばれて賞賛された。

これらの四大競技祭は次の特徴を持っていた。

- ・優勝者への賞品が聖なる葉冠であること
- ・起源を物語る伝説に葬送競技が存在すること
- ・オリンピア以外では文芸競技（音楽、劇、詩など）も行われていたこと

オリンピア以外の地での祭典は、紀元前 6 世紀頃までには確立した。

ペロポネソス半島の北西部にあるネメアで行われた古代のネメア競技祭は、古代四大競技祭の一つで前 573 年に始められた。一時ネメアの南部に位置するアルゴスに競技祭が移されたが、紀元前 4 世紀にネメアの地に戻り、ゼウスの神殿とともに競技場がつけられた。ネメア競技祭で行われた競技はオリンピアとほぼ同じで、競走、五種競技（短距離走、槍投げ、円盤投げ、幅跳び、レスリングの総合）、格闘技（ボクシング、レスリング、パンクラチオン）、戦車競走で、少年（10 代前半）青年（10 代後半）成人（20 代以上）の三つの部門に分けられて行われた。笛、琴、歌など音楽競技も後に加えられた。

5-2. ネメア競技祭の復興

ネメア競技祭は、1996 年に復興された。復興ネメア競技祭は、1995 年に設立されたネメア競技復

興協会の手による。この協会は K. アリストテレスが会長で、ギリシャ国防省とカリフォルニア大学バークレー校が経済的に支援した。また会員は一人 10 ドルを年会費として納めることになっている。現在の会員数は 2000 名ほどである。第 1 回復興競技祭は 1996 年に開催され、以後、4 年ごとに行われてきた。2004 年 7 月の競技祭は、3 回目となる。

ことの起こりは、1974 年から始まったネメアのゼウス神殿や競技場の発掘が 1992 年に終了した際、発掘に携わったカリフォルニア大学バークレー校関係者とネメアの住民とが話し合い、記念にネメア競技祭を開催しようとの案が出されたことによる。1974 年から 81 年までの競技場の発掘は、ネメアのゼウスの聖域を発掘するためのより大きな事業の一つとして、カリフォルニア大学バークレー校の古典考古学者 S. ミラー教授の指揮で行われ、彼の学生や卒業生達が、その発掘に大いに貢献したのであった。

彼のネメア競技祭復興についての基本的な理念がアテネで発行されている Athens News に掲載されている。

「オリンピックムーブメントの背後にある理念を信じている我々の多くが、近代オリンピックの発展に狼狽させられている。我々は近代のオリンピックに参加できない、なぜならそれは最高の競技者のための祭典であるからだ。それにコマーシャルイズムが本来の目的を歪めているように思われる。ネメアは世界にネメア競技祭の復興の機会を与えるのみではなく、それが生まれたギリシャの土に帰ることで、オリンピック精神を復興するのである。その精神に直接触れたいと思うすべての



写真 15：デルフィの競技場（著者撮影）



写真 16：ネメアの競技場（著者撮影）

参加者は、古代の競技場でスタート装置を使って裸足で走るにより、実感することができるのである。¹²⁾

ここで語られているように、ネメア復興競技祭は古代のオリンピック精神の復興を意図していたといえる。ギリシャの地で古代の風習を取り入れて行うことにより、参加者にオリンピック精神を体感させるというものである。

今年の復興競技祭でも発掘の成果を生かして、古代の風習を取り入れて、次のような手順で行われた。

- ・古代にならい、夏至後 2 番目の満月の日に行う
- ・競技種目は短距離走（89m で古代の短距離走の半分）と 7.5Km の長距離走
- ・開会宣言が行われ、聖火が灯火される
- ・選手は古代の更衣室（アポディティリオン）に入り、靴を脱ぎ、キトーンという古代人の衣装を着る
- ・順番に並び黒い衣装を着たヘラノディカイの前で不正行為を行わない旨の宣誓を行う
- ・選手入場門でもあるトンネルを抜けて競技場へと向かう
- ・笛の演奏と布告官の呼び出しを受けてスタートラインに向かう（12 人 1 組）
- ・古代のスタート台の後ろに立ち、スタート装置のひもが下に落ちてからスタートする
- ・勝者はその場で氏名がヘラノディカイにより公表され、勝者の印として鉢巻きを頭につける
- ・すべての競技終了後に勝者に野生のセロリの葉冠が授与される

満月のもと晩餐会が町で行われる

競技に参加した人は約 1000 人、ギリシャ、アメリカ、カナダ、ブラジル、スイス、フランス、イギリス、ベルギー、デンマーク、アルバニア、ブ

ルガリア、セルビア、オーストラリア、カメルーン、日本の 15 カ国で、最高齢者は 97 歳（アメリカ人）、最年少は 4 歳であった。競技場からは理想郷と仰がれたアルカディアの山々が見え、緑美しく、実に幻想的な場所であった。

非常に素朴な祭典であったが、古代の競技祭のありようを想起させた。スポンサーの商標のない中、大自然の中を裸足で競技場を走る感覚は心地よいものであった。誰もが参加でき、古代の雰囲気味わうことがこの祭典の意味合いだが、それを十分に感じさせ、今日のスポーツの祭典の原点を垣間みる競技祭といえよう。

なお、この祭典の翌日（8 月 1 日）には、ネメアのゼウス神殿の復原作業についての案内、基金提供者の銘版の除幕式、オリーブの木の植樹が行われた後、夕方 6 時から、次のようなネメア祭の文化プログラムが行われた。

- ・歌と演奏
- ・神々と英雄に捧げる古代舞踊（古代エビダウロス舞踊団）
- ・詩の吟唱（ハーブを伴う）
- ・古代劇：最後のアマゾン族

古代のオリンピックがそうであったように、スポーツの祭典はスポーツのみではなく、それに付随して音楽、芸術、古代劇などの文化の振興にも大きく貢献した。復興ネメア祭では、そのことも考慮して、文化プログラムを取り入れている。この点も本来の祭典の意味を今日に投げかけているといえる。またこれらの出演者は、ネメアや近隣の人々による演奏や上演が多いことから、地域の文化的振興にも貢献しているものと思われる。



写真 17：選手宣誓（著者撮影）



写真 18：スタート装置（著者撮影）



写真 19：更衣室にかけられたオリーブ油の壺
（著者撮影）



写真 20：競走のスタート（沼沢秀雄撮影）

6. 終わりに

オリンピック競技会の開催に際して、メディアなどで報道されるのは、競技種目ごとの成績の結果、しかも自国の選手の活躍が大部分を占め、そのほかのことはほとんど報道されない。文化的な面についてはなおさらである。オリンピック競技大会の開催は、オリンピック・ムーブメントの一つにすぎず、そのほかのさまざまなプログラムを含めて、「オリンピック」といえる。その意味で、オリンピック・ムーブメントの一環として行われる聖火リレーや文化プログラムなどの理解を深めていくことが、本来のオリンピック・ムーブメントの理解につながると思われる。本学の総合科目で行われている大学生対象のオリンピックに関する講座を継続して開き、オリンピック・ムーブメントに関する知識と教養を提供して行くことは重要であろう。そしてオリンピックとは競技面のみならず、多様な文化の複合であり、オリンピックの文化的な遺産を次世代に継承して行くことが必

要であると思われる。

注

- 1) Pausanias, *Description of Greece* 1. 30. 2.
- 2) Herodotus, *Histories*. 8. 98, Aeschylus, *Agamemnon*, 312, Plato, *Laws*, 6. 776b.
- 3) Plato, *Republic*. 1. 328a.
- 4) Plutarch, *Arisides*, 20.
- 5) Philostrat, *Heroica*, 20. 24.
- 6) Pausanias, *Description of Greece*. 5. 7. 7.
- 7) Pindar *Olympian Ode* 3.
- 8) Pausanias, *Description of Greece*. 5. 15. 3.
- 9) K. ケレニイ著、高橋英夫訳、ギリシアの神話；神々の時代。中央公論社。1974. p. 157.
- 10) V. ブルケルト著。橋本隆夫訳、ギリシアの神話と儀礼。株式会社リポート。1985. p. 197.
- 11) Pindar *Olympian Ode* 8.
- 12) Athens News (2004. 2. 13), p. 39.